

ナルニア国物語 第2章

カスピアン王子のつのはえ

C・S・ルイス



評=テモテ・コール

ライオンのアスランが魔女と戦ってから1000年以上がたち、ナルニアが外国人(テルマール人)に支配され、アスランへの信仰と昔の偉大な奇跡がほぼ消えなかった頃、テルマール人のカスピアン王子が、乳母と家庭教師に育てられていた。家庭教師は、古いナルニアについての禁じられた物語を教えている。

王子は、叔父の力ある悪王ミラースから命を狙われる。カスピアンは深林に逃げ込み、そこで古いナルニアの話は真実であることを知り、ナルニア国復興の使命を帯びる。

一方、この世界では、ピーター、スーザン、エドモンド、そしてルーシーのベベンシー4兄妹がナルニアの冒険から帰ってから、一年しかたっていない(「ライオンと魔女」)。子どもたちは、不思議なことにまたナルニアに呼び戻され、カスピアン王子に率いられた本当のナルニア人が使命を実現する手伝いをする。彼らは再びナルニアの真の主であるアスランに会い、国全体に及ぶ壮絶な戦いに巻き込まれる。

ルイスの最初のナルニア国物語『ライオンと魔女』が、寓話としてイエスの死、復活、罪からの死を表していたとするなら、第2作『カスピアン王子のつのはえ』は、神への信仰、また弟子としてキリストに従う意味について巧みに描き出す。

ルイスがナルニア国シリーズを書いたとき、ヨーロッパはようやく第二次大戦の戦渦をくぐり抜け、今度は冷戦の恐怖の中に入ろうとしていた。多くの地域で共産主義が台頭し、人類からキリスト教信仰と神への求めを無情に消去ろうとしていた。一方、西欧では、人々は実存主義とポストモダンニズムをもはやし、絶対的真理と道徳を否定する傾向にあった。同時に、社会および個人の生活の基本として、科学技術を重んじる間の主観的な経験を強調した。本書は、表面は子ども向けだが、「聖書の神は生きていて、信仰者がいかなる迫害を受けても神の真理は勝利する」と宣言している。

個々の登場人物で言うなら、目の危機への対応を見ると、カス

ピアン王子は「求道者」、トランブキンは「疑う」小人、ニカプリクは「無神論者」である。「ライオンと魔女」と同じく、ルーシーは「忠実な信仰者」で、友だちの不信仰にもめげず忠実であるようチャレンジを受ける。このように、本作品は信仰的レッスンの宝庫であり、キリスト教信仰について家族で話し合う絶好のチャンスを提供してくれる。

映画は、日本でも5月24日に劇場映画として公開される。監督はアンドリュー・アダムスン。カスピアン王子にベン・バーネス。リアム・ニーソン(アスラン)なども再び登場する。ロケ先は、イギリスとニュージーランド。

ナルニア作品は、それぞれの期待を胸に秘めた世界中のファンが見るだろう。同じジャンルの大作『ロード・オブ・ザ・リング』もある。「ライオンと魔女」の出来映えに劣らず、また原作の物語に忠実であろうとしたプロデューサーの苦勞がしのばれる。

家族みんなで楽しめる娯楽作品として大いに期待される。

